

きれいな好きで繊細な 嫁入り前の雌牛たち。

上士幌を拠点に道内7カ所の牧場を経営するノベルズグループ。牛肉本来のうま味が自慢の交雑種ブランド牛の「十勝ハーブ牛」は、32カ月を超える長期の飼養を経て、味わいに深みが増します。その生産は、預託農家と呼ばれる地域の畜産関係者に支えられています。



地域共生シリーズ①

預託農家 足寄・木村牧場

ノベルズグループの牛たちを一時的に預かってもらう預託契約を結ぶ牧場は、道内5カ所。うち足寄町螺湾本町の木村牧場では、400頭以上を預かっている。すべてがホルスタイン種と黒毛和種の掛け合わせた交雑種で月齢10カ月前後の雌。市場で競り落とされ、トラックで運ばれてくる。

上士幌へ転居し出産

環境の変化に敏感でデリケートな彼女たち。「最初は戸惑い気味で、食欲も落ちてしまいます」と、同牧場経営の木村太樹さん(38)。それでも1週間もすれば、牧場にも慣れて食欲を取り戻す。食事ときには、餌を配るミキサー車のエンジン音が聞こえると、首を伸ばして「モー、モー」と騒ぎ出す。ただし、彼女たちが、木村牧場で過ごすのは、「お嫁入り」までの数ヶ月だけだ。

その後、ノベルズ上士幌牧場に移され、出産・肥育のステージに進み、「十勝ハーブ牛」のブランドで全国に出荷される。このブランドを冠するのは、出産を経て、32カ月余りの飼養期間を健康的に過ごした牛だけだ。健康管理に気を配る預託農家の責任は重い。

「夢は諦めない」と約束

木村さんが預託を引き受けたのは、5年ほど前。肉用牛の生産農家は、市況の影響を受けやすく、経営の安定化が課題。もともと黒毛和種の繁殖を手掛けていたが、取引先の経営悪化で、自らも経営方針の見直しを迫られた。「預託を始めたとき、ひとつだけノベルズの延與社長と約束したことがあります。黒毛の繁殖という自分の夢は絶対に諦めないという約束です」

黒毛繁殖牛の増頭を目指す

実は、木村さんと株式会社ノベルズ社長の延與雄一郎は、帯広農業高校の出身で同級生。夏休みに、木村さんから仲間たちが延與家に泊まり込み、キャンプファイヤーを囲んだ。卒業後、畜産の分野でそれぞれ道を歩んだ2人。交雑種の雌牛肥育に取り組んだ社長延與と木村さんの人生が、預託を介して交差した。

現在、木村牧場には、繁殖雌牛と子牛を合わせて約100頭の黒毛がいる。「預託で事業のベースをつくって、黒毛の繁殖で拡大を目指します。もっと頭数を増やしたいですね」

餌をはむ交雑種の雌牛たち。牛舎の寝床が雨水でぬかるむときれいな牛たちは睡眠不足になることも。今年6月、4棟ある牛舎の床面に「コンクリート」を打った。夏以降の台風による大雨を何とか乗り切れたという

地域に生かされ、牛を育む。

